

### 3. SWY という多文化環境を最大限に活用するために

本報告書は Intercultural Development Continuum(IDC)を説明したのちに、IDC に基づいて開発された、IDI を使用して SWY29 の出航前と帰国後の異文化感受性の発達の調査結果を述べてきた。最後の章ではまとめとして、なぜ世界船に異文化感受性の発達が大切なのか、世界船の特色をより生かすための提案を行いたい。

#### 3-1 なぜ本事業に異文化感受性の発達が大切なのか

世界船には実に多様な若者が参加する。国籍、民族、宗教、母国での社会的地位、社会階級、言語、学歴、職歴、ボランティア経験、身体能力、多彩な趣味興味、そして異なった価値観、及び価値観の違う人たちとの深い交流や仕事の経験の有無、等々。これらの多様なカテゴリーの中で共通の価値観があれば、それぞれのカテゴリーは一つの「文化」と言って良い。例えば「ボランティア経験のある人」と「ない人」、「学生」と「社会人」と「その他」などなど、「我々」対「彼ら」という意識はあつという間にできる。異文化感受性の発達は、「我々」対「彼ら」という構図がそれほど単純なものではない、という気付きをはぐみ、「彼ら」の中の「私にもある」要素、そして「我々」の中にある「私とは違う」要素を見つける。さらには「彼ら」の考えに立った視点（「私ならそうは考えない」のではなく、「あなたは私ではないので、きっと違うように考えるのだろう」）を持つことが可能である、といつも思えるようになる。異文化感受性の発達は認知的複雑性の発達(development of cognitive complexity)が基本なのである。

この発達は、以下のような形で現れる：様々なことに関する知的好奇心を持ちながら相手をリスペクトして行うコミュニケーション能力。時と場合によっては自分のやり方は必ずしも「正しい」のではないが、それでもセルフエフィカシーは持つことができる、強しなやかな心。相手の視点からも考えることができるので、「違いの懸け橋」ともなれる文化的汎用性。「現代のグローバルな人」はこのような特性を持つ地球市民である、と教えてくれるのが、異文化感受性の発達である。そして、「グローバルな人」と「ローカルな人」で大切なことは同じであることもわかる<sup>2</sup>。言語が違うときこそあれ、前述の特性は国内外に共通して、誰に対しても大切なものなのである。また、「異文化」という考え方は「多様性」に置き換えることができる。「文化」や「国」の要素は人の価値観に大きな影響を与える重大な要素ではあるが、「多様性」のうちの一つの要素である。異文化感受性の発達は、多様性に対する感受性の発達と言い換えることもできるだろう。

また、世界船の経験は「多様性」をどのように紡いでいったのか、という「リーダー」の経験と等しい、と認識させることもできる。Integrity をもって自分のやり方をやり方の異なった人たちにどのように説明するのか（時には説得も必要かもしれない）。共通のゴールを見出すために提案される様々なアプローチの理解と決定、行動。そして自分とは異なった要素(多様な

<sup>2</sup> 同様のことを平成 25 年の第 2 回検討会の際に元国連事務総長の明石さんが発言なさっていたことを議事概要で読みました。

要素)をどのよう活用するのか、どうやって育てていくのか、のための多様な方策。すべからく、リーダーの資質である。これらはすべて多様性に対する認知複雑性の発達の基本となる。自分を知り、他者を知り、グループを紡ぐ。これは Emotional Intelligence で説明される多様性の中のリーダーシップの基本である<sup>3</sup>。

このような多様性に対する認知複雑性、あるいは異文化感受性は自然に発達するわけではない。例えば動物であれば(あるいはヒトも)同種、同族で固まり、自分のグループの利益のみを追求する(動物であれば、異種はすべからく敵とみなす)のが普通である。気の合ったもの同士で集まる、自分のやり方を認めてくれる人のみで仕事をするのはたやすい。まさに、Minimization は自然の摂理なのだろう。しかし自然状態で Minimization を強めるのは、友達を作るのが目的の国際交流ならばまだしも、この事業の目的ではないはずだ。

また、異文化の感受性、および多様性に対する認知的複雑性を高めるためには、日本では当たり前であって、「なぜ」や「何のため」を言語化せずに来たことをすべて言語化するトレーニングが必要である。これができるようになると異文化コミュニケーション能力も発達し、多角的な見方ができるようになるのである。つまり、Minimization を打ち破るには、トレーニングが必要なのである。日本人青年に行った出航前トレーニングのような内容をより掘り下げた形で行われるようなワークショップが9月の研修中から行われるべきである。また同様のワークショップのみならず、基本的な意識形成を行うワークショップが日本人青年に対してのみならず、外国人青年に対しても必要である<sup>4</sup>。SWY29の日本人青年で帰国後のDO値が大きく減少した若者は、キャビンメイトとその友人に電動髭剃りを貸してほしいと請われたが、筆者から「DNAの交換をしないように。歯ブラシや髭剃りは共有しないこと」と言われていたばかりに「貸せない」断った結果、「ケチ」扱いされて二人から非難された。彼はなぜ貸せないのかを説明できなかった。「彼らが病気を持っていると思っている」、と誤解されたくなかつたらしい。これは彼にとっては大きなネガティブな経験である。Hygieneに関することは共通認識として日本人青年のみならず、全員に伝わっているべきである。このようなことはNL会議の時に事前に仕込んでおくこともできるし、出航前や船の中での共同のワークショップで行うことも可能であろう。また、「NLが必ず行う、異文化の感受性、および多様性に対する認知的複雑性を高めるためのワークショップ」というのがあっていいかもしれない。NL会議の時にNLが受講して、船の中では彼らがファシリテーターとして参加者に対して行うのである。

昔、世界の若者との出会いが珍しかった時代であれば、とりあえず、多様な環境に全員をどさっと入れて、何が起こるかを期待してみよう、ということもあったかもしれないが、今はすでにそのような時代ではない。Minimizationからの脱出、そ

<sup>3</sup> Connerleyら(2005). Leadership in a diverse and multicultural environmentなどが参考になる。

<sup>4</sup> この中には、たとえば、インフルエンザに対する各国の意識を統一するために、「私は必ずインフルエンザの予防接種をします」「具合が悪くなったら、うそをつかずにすぐに報告します」「これが守られない場合は、下船させられても文句をいみせん」というような念書にサインさせたりなど、日本がインフルエンザをどれくらい深刻に考えているかを個人に理解してもらう必要がある。外国人青年、あるいは、国によっては、インフルエンザをタダの風邪だと思っている場合もあり、日本政府の対応はジョークだと思っている場合がある—SWY25の筆者の経験より

して DO 値のばらつき(標準偏差値の大きさ)、特に DO 値を大きく下げた参加者の数を減らすには、教育的介入 (educational intervention) あるいは、方向性を持ったトレーニング (guided training)が必要な時期に来ているといえよう。

#### 参考文献

- Adler, N. J., & Gundersen, A. (2008). *International dimensions of organizational behavior*. Mason, OH: South-Western Cengage Learning.
- Bennett, M. J. (1993). *Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Connerley, M. L., & Pedersen, P. B. (2005). *Leadership in a diverse and multicultural environment: Developing awareness, knowledge, and skills*. Sage Publications.
- Hammer, M. R., & Bennett, M. J. (2002). *The Intercultural Development Inventory (IDI) manual*. Portland, OR.
- Seelye, H. N., (ed) (1996). *Experiential Activities for Intercultural Learning*, Boston, MA: Nicholas Brealey Publishing.
- 坂田浩, & 福田スティーブ. (2008). 効果的短期語学研修プログラムの開発を目指して: 異文化感受性質問紙 (IDI) による短期語学研修の効果測定. 徳島大学国際センター紀要, 4, 1-16.
- 吉原秋, 熊本早苗, & ウィンスカウスキークリスティン. (2012). 短期学外実習「国際文化理解演習」に関する報告: IDI を用いた試みについて. 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集, 14, 65-70.